2024 第10回 これからの建築士賞 審査結果

「建築士」は日本の都市と建築にかかわる重要な職能資格であり、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注者など幅広い業務に携わりながら、未来につながる社会の実現のため努力してきました。近年では防災、環境、高齢化と人口減少、歴史文化の喪失など多くの課題の中で、その専門的な知見を生かしながら、魅力的な社会、街並み、建築空間の実現を目指して活動しています。

なかでも最近は他の建築関係の会とも連携し、それぞれの地域をベースにした協働も盛んになってきており、これらの新たな活動が大きな波となって地域社会の未来に力となる事も期待されています。多様な分野における建築士ならではの新しい動きに光を当て、顕彰し、支援するとともに広く世の中に伝えようとするのが「これからの建築士賞」の目的です。

審査結果

入賞5点（応募点数16点）

1	業績名	西葛西アパートメント
	受賞者	駒田 由香、駒田 剛司
2	業績名	町の営繕
	受賞者	アリソン 理恵
3	業績名	まちとみどりの実験室
	受賞者	池田 雪絵、大野 俊治
4	業績名	再生をデザインする
	受賞者	渡邉 明弘
5	業績名	島へ通い続ける
	受賞者	石飛 亮

審査員による総評・講評および入賞作品の詳細は、こちらからもご覧いただけます。
https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/pdf/korekara-vol.10.pdf

過去の受賞提案こちらからご覧いただけます。
https://tokyokenchikushikai.or.jp/award/index05.html

募集要項

1. 賞の対象

都市と建築に関わる近年の活動や業績で、設計監理、施工、行政、教育、まちづくり、発注など建築士としての多様な立場を通じて行った未来につながる社会貢献に対して、その活動・業績を担った建築士もしくはそのグループを顕彰する。
未来につながる社会貢献とは、たとえば、美しい景観の形成、安全で魅力的なまちづくりや空間の提案、自然環境や歴史的環境の保全、地球温暖化・人口減少・高齢化社会に対する提案、弱者に対する対策、文化・にぎわい・コミュニティの創出、建築に関する啓蒙・普及など多様であるが、さらに、これからの建築士の仕事を開拓するような、従来の建築士の枠を拡げる活動の応募も大いに期待したい。

2. 名称及び受賞数

これからの建築士賞　10点程度（但し、応募点数による）

3. 応募資格

原則として建築士もしくは建築士を含むグループで、活動のベースが首都圏にあること。
過去の応募者の再応募は可とする。
審査員が直接係った案件は応募対象から除外される。また、審査員が所属する事務所、グループが審査対象となる場合は、その案件に係る一切の審査から外れるものとする。

4. 応募方法

別紙候補推薦書に記入の上、必要に応じて参考資料をA4用紙3枚以内にまとめて、事務局まで提出のこと。関係資料は返却されないものとする。郵送、メールによるデータの送付も可能。候補推薦書は東京建築士会ホームページからダウンロード可能。自薦、他薦を問わない。

5. 審査員

青木 淳　（AS）
貝島 桃代（アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授）
加藤 耕一（東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授）
西田 司　（オンデザイン代表／東京理科大学准教授）

6. 審査・顕彰

6月 上旬　公告
8月23日　応募書類提出締切
9月 上旬　審査会
2025年6月上旬　東京建築士会総会の席上で顕彰予定

7. 発表・その他

受賞者の活動資料を上記総会時に配布します（活動資料はA4版、受賞者が作成するが、場合によっては推薦者が協力する）
受賞者及びその活動資料については本会会誌、ホームページに講評とともに掲載するほか、各メディアに公表予定。
※後日、審査員と受賞者によるプレゼンテーションの機会を準備する予定。

8. 応募締切

2024年8月23日（金）必着
応募書類は、下記のメールまたは郵送にて提出ください。
郵送の場合は、8月23日の消印有効。

9. 応募書類提出先・お問合せ先

一般社団法人 東京建築士会　「これからの建築士賞」係
〒103-0006 東京都中央区日本橋富沢町11-1 富沢町111ビル5階
TEL：03-3527-3100　FAX：03-3527-3101
E-Mail：event02@tokyokenchikushikai.or.jp
https://www.tokyokenchikushikai.or.jp/

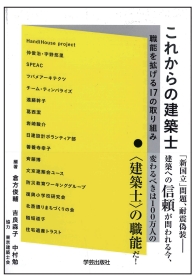
関連情報：話題の書籍

これからの建築士 ―職能を拡げる 17 の取り組み

建築への信頼が問われる今、変わるべきは 100 万人の＜建築士＞の職能だ！

第１回これからの建築士賞審査結果を紹介した『これからの建築士―職能を拡げる 17 の取り組み』（編著：倉方俊輔、吉良森子、中村勉　協力：東京建築士会）が出版されました。この賞の内容が詳しく掲載されています。

全国の書店・ネット書店で販売
定価：2,530 円（税込）
発行：学芸出版社
http://www.gakugei-pub.jp/



総評文

青木 淳(AS)

何らかの理由があって、従来的な意味での「建築士」の枠からふとはみ出てしまっている。その結果、その活動のあり方が「これからの建築士」のひとつのあり方を指し示している。そんな経験を見つけ顕彰するのがこの賞の意図だろう。というのも、今現在、私たちのまわりには現実問題として、従来的な意味での建築士の職能を超える事態が溢れているし、それに応じた真摯な活動が多く出来しているにもかかわらず、それが必ずしも意識化され、名づけられているわけではないからである。その活動が言語化され意識化されたとき、「建築をつくる」ということの意味は広がるし、また建築士の職能は拡張する。この賞はそれを推し進めることを目指したものだ、と私は捉えている。そこから外れた応募も散見された。たとえば、関係者の意見や希望をよくすくいとったということ自体は、それがどんなに良き建築として結実したとしても、それだけでは残念ながらこの賞の対象にはならない。それだけでは「これまでの建築士」にとどまるからだ。それが「これからの建築士」になるためには、もう一歩、その実現のために、新たな具体的な方法を考案しそれを定式化できている必要があるし、その内容をしっかりと記述していただく必要もある。中村航さんの応募作品は、その記述さえあれば選定されただろうに、と残念だった。

©前谷 開

青木 淳(あおき じゅん)

1956年横浜生まれ／1982年に、東京大学大学院修士課程建築学専攻修了／1991年、青木淳建築計画事務所(現在、ASに改組)を設立、主宰／代表作に、「馬見原橋」、「潟博物館」(1999年日本建築学会作品賞)、「青森県立美術館」、「ルイ・ヴィトン名古屋・栄」、「大宮前体育館」、「三次市民ホール きりり」、「京都市美術館(通称:京都市京セラ美術館)」(西澤徹夫との共作、2021年度日本建築学会作品賞)など／2005年に芸術選奨文部科学大臣新人賞、2020年度に毎日芸術賞を受賞。京都市美術館(通称:京都市京セラ美術館)館長／東京藝術大学名誉教授

貝島 桃代(アトリエ・ワン／スイス連邦工科大学チューリッヒ校建築振る舞い学教授)

21世紀は、20世紀に急激に変化した環境の問題を読み解き、それを診断、よりよい状況に修正することがどの分野でも求められています。建築もしかり。そして建築士の職域もそうした社会状況のなかで変化しています。「これからの建築士」賞の意味は、その変化を敏感に意識し、その職能を活かし、あらたな建築士像へ挑戦する実践を奨励し、広く共有することだと思います。こうした仕事は通常の建築設計の業務とは異なり、いわゆる設計図や竣工写真では伝わらないものになっていると思われ、広がりつつある建築の職域を示す表現方法の工夫や開発が必要になっています。今回受賞対象となったプロジェクトは、これを意識したものであったと思います。それは、これまでの建築設計図を否定することではありません。個々の仕事の詳細を示すプロセスドローイングや、そしてそれらを環境に位置付けるマッピングドローイングなど、むしろ設計図で磨き上げてきた建築士の腕を振るう場となり、それが多くの人に届くメディアへと展開すれば、その職域の広がりを後押しするものになるのです。それは20世紀、専門家に囲い込まれてしまった建築文化というものをひとびとの手に戻す運動でもあります。これからの建築士はそうした本当の建築文化の醸成を担うべき職業であってほしいと考えています。

©石渡 朋

貝島 桃代(かいじま ももよ)

1969年東京都生まれ／1991年日本女子大学家政学部住居学科卒業／1992年塚本由晴とアトリエ・ワン設立／1994年東京工業大学大学院修士課程修了／1996〜97年スイス連邦工科大学チューリッヒ校(ETHZ)奨学生／2000年東京工業大学大学院博士課程満期退学／2000〜09年筑波大学講師／2009〜2022年筑波大学准教授／Harvard GSD、ETHZ、The Royal Danish Academy of Fine Art、Rice University、TU Delft、Columbia University GSAPP、Yale School of Architectureで教鞭をとる／2012年RIBA International Fellowship／2018年第16回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館キュレーター／2022年ウルフ賞芸術部門(建築)受賞／2017年よりNPO法人チア・アート副理事長、2024年同理事長／2017年より、現職 ETHZ Professor of Architectural Behaviorology

加藤 耕一（東京大学 大学院工学系研究科 建築学専攻 教授）

改めて今年の受賞者とその活動を眺めてみると、建築士の活動が、ただ単に良い建築を作ることにとどまらず、地域に対してどのような拡がりを有し、またどのように貢献していくのかという点に、私たち審査員一同も着目していたことに気づかされました。単なる設計者という枠組みを大きく越え、まさにこれからの建築士としての活動の拡がりを示してくれた受賞者のみなさんに、私たちは感動し、敬意を表したのだと思います。審査は終始穏やかで、審査員の私たちも温かな印象に包まれながら議論を交わしました。それは、審査員長を定めないフラットな議論のなかで、鋭く巧みに議論をリードしてくださった青木淳さんのおかげでもあったのですが。「地域と建築」に加え、「時間と建築」が、もうひとつの重要課題でした。応募作品の中にも多数、「時間と建築」を扱った優れた作品、優れた試みがあったと思います。このテーマは「これからの建築士」というよりも、「今日の建築士」の最重要テーマのひとつといえます。そのなかでも受賞作に選ばれた「再生をデザインする」は、緻密な方法論の提示によって、これからの更なる発展を大いに期待させてくれるものでした。これからの建築士のみなさんのますますのご活躍を祈念しています。

加藤 耕一（かとう こういち）

1973年東京生まれ／1995年東京大学工学部建築学科卒業、2001年同博士課程修了・博士（工学）／2002〜2004年東京理科大学理工学部助手／2004〜2006年パリ=ソルボンヌ大学客員研究員／2009〜2011年近畿大学工学部講師／2011年東京大学大学院工学系研究科准教授／2018年〜同教授／主な著書：『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会、2017）、『ゴシック様式成立史論』（中央公論美術出版、2012）、『「幽霊屋敷」の文化史』（講談社現代新書、2009）／主な受賞：日本建築学会賞（論文）（2018）、建築史学会賞（2018）、サントリー学芸賞（芸術・文学部門）（2017）、日本建築学会奨励賞（2004）他

西田 司（オンデザイン代表／東京理科大学准教授）

今年2年目となる審査会は、作品内容もガラっと変わり、とてもレベルが高いものであった。最終的に選外となった作品の中にも継続することで、しっかりと実績になり、今後の賞になる萌芽をもった作品も多かった。そんな中入選した5作品はどれも、これからの建築士の役割や価値を提案書から感じられる魅力があった。

「西葛西アパートメント」は、建築家駒田夫妻が、隣地に建つ18年前に自身が設計した作品と対話することで、2つの建物の敷地境界部分に新しい不動産価値を埋め込むアイデアが素晴らしい。集合住宅が街に対し、どう開いていくかをハードとソフトの両面から提案している。「町の営繕」は、コーヒーショップMIAMIAをはじめ、自身の事務所も同じエリアにあり、その場所で暮らしながら働き、まちを継続的に観察しているからこそ気づける粒揃いのマイクロリノベーションであり、積み上がった日常のデザインが素晴らしい。「島へ通い続ける」は、五島列島という離島で、通い続けることで、まち医者のような建築活動をしている石飛さんの姿勢や生き方に感銘を受けた。その場所にある素材や、その場所でつくられる構造など、リアルローカルな設計手法も含め、建築的、都市的な視点が地域の価値を高めている。全体を通して、建築家の空間のデザイン力に加え、時間のデザイン力を感じた審査会であった。

西田 司（にしだ おさむ）

1976年生まれ／使い手の創造力を対話型手法で引き上げ、様々なビルディングタイプにおいてオープンでフラットな設計を実践する設計事務所オンデザイン代表／近作に「まちのような国際学生寮」「TOKYO MIDORI LABO.」など／東京理科大学准教授／ソトノバパートナー／編著書に「オンデザインの実験」「楽しい公共空間をつくるレシピ」「タクティカル・アーバニズム」「小商い建築、まちを動かす！」

1

西葛西アパートメント

駒田 由香、駒田 剛司

西葛西アパートメント

駒田建築設計事務所　駒田剛司＋駒田由香

西葛西アパートメントは、住み、働き、商い、外部の人々が集う複合建築である。1階の街に開いたオープンスペース、ベーカリー＆カフェ、2階のコワーキングスペース、3、4階の賃貸住戸、屋上の7丁目ROOFからなる。単なる集合住宅ではなく、生活圏としてのコミュニティを再生するために、人々が交流し新たな価値を生む場の実現を目指した。

生活圏に賑わいを創出

住宅街が豊かに賑わう、生活圏としてのコミュニティを創出したい。そのために、住む人、働く人、商う人、外部の人々が集まる場所を創る。小さな建築に4つの複合的な機能を集約した。

コミュニティを育てる

やどり木では地域住民によるワークショップ、FEoTではコワーキングスペースを企画運営。地域の人々と協力し、コミュニティを育てる仕組みづくりを行っている。

地元人気ベーカリーを誘致

気軽に誰もが出入りでき、生活に密着した飲食として、地元人気ベーカリーを誘致。オーナーとコンセプトを共有し、竣工後はイベントを共同で主催している。

コワーキングスペース

自由なスタイルで働く場所を創りたいと、月額制のコワーキングスペース「FEoT」を設置。運営を駒田事務所で行い、会員には「7丁目PLACE」でマルシェを開催する人もいる。

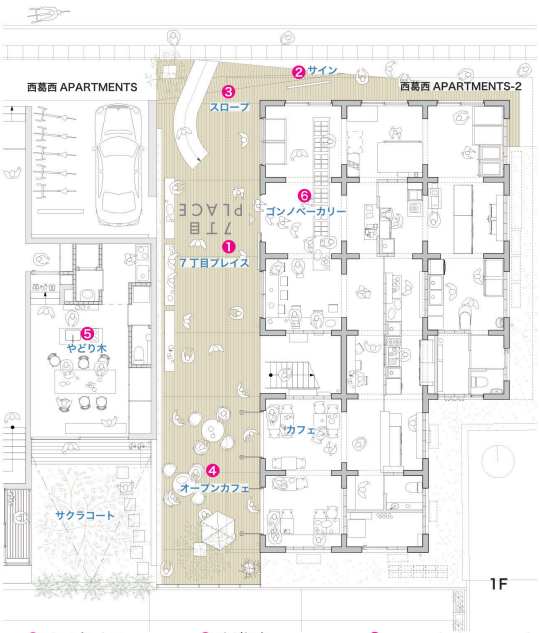
地域を変えていく

FEoTの会員と「地域対応箱」のデザインに関わり、GD賞ベスト100防災賞を受賞。西葛西で施工中の建物では、1階店舗を駒田事務所で運営予定。小さな拠点を増やし地域を変えていく。

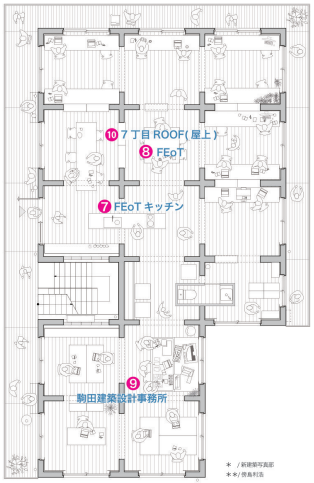
❶ 7丁目PLACE
路地のようなオープンスペース。動線を重ね、賑わいを生み出している。誰でも気軽に入れる開かれた場所となっている。

❷ サイン
小さな公園をイメージさせるサインを設置。建物で統一したロゴデザインは、この場所の大切なアイデンティティになっている。

❸ スロープ
7丁目PLACEへのスロープは路地中央に配置。ほとんどの人がこのスロープを利用。カーブしたスロープは、この場所のチャームポイントにもなっている。



西葛西 APARTMENTS や西葛西 APARTMENTS-2 の入居者が、コワーキングスペース「FEoT」で仕事をし、ランチは「gonno bakery market」、週末は「7丁目PLACE」のマルシェで花を買う、やどり木でのワークショップに参加など、「西葛西アパートメント」全体を使いこなす事も増えている。



❹ オープンカフェ
サクラコートに面した7丁目PLACEの奥は、カフェのテラス席になっている。

❺ やどり木
駒田事務所の会議室兼、地域住民に向けたレンタルスペースとして運営。

❻ gonno bakery market / カフェ
西葛西APARTMENTS-2の計画段階で地元のベーカリー、「gonno bakery market」を誘致。カフェは、7丁目PLACEに開いている。

❼ FEoTキッチン
お茶を淹れながら、小さなコミュニケーションが生まれる場となっている。

❿ 7丁目ROOF
出入り自由な7丁目ROOFと名付けた屋上は居住者だけでなく外部の人々にも開放している。

❾ 駒田建築設計事務所
3.2m×3.0mのユニットが門型フレームを介してFEoTと緩やかに繋がる。駒田事務所とFEoT会員は、ひとつながりのスペースをシェアする仲間のような感覚。

❽ FEoT
住宅街のオフィスであることをポジティブに捉え、ゆったりとした居心地の良いスペースをつくることを心がけた。フリー席、固定席があり、現在会員数は20名程度。

西葛西アパートメントは、設計事務所を地域に開くことで街や地域との交流を生み出していく手法の、ひとつの理想型といえるのではないだろうか。街に対してなにか強烈に介入するというよりは、7丁目プレイスと命名された路地的な広場に人々をそっと引き込む点が本作の肝といえる。その場所に引き込まれた人々は、「地域の活性化」という無味乾燥な言葉が、豊潤に具現化されていることに気づくのだ。その点では企画段階で地元の人気ベーカリーを誘致したことが成功の要因だったとも想像される。建築の豊かな体験を五感で捉えるならば、焼きたてのパンの香りも、そこに大きく貢献するはずだからだ。地元の人々に愛される建築を、このようなかたちで具現化した建築士のおふたりは、まさにこれからの建築士賞に相応しいと高く評価したい。

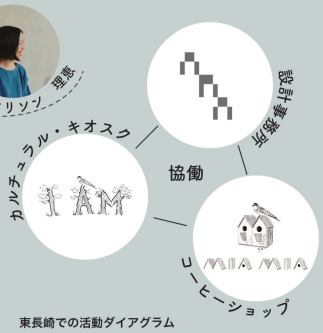
加藤 耕一

2 町の営繕 アリソン理恵

町の営繕

アリソン理恵

自分たちの暮らす町を反省的な眼差しで捉え直し、快適に使い続けられるように手を入れながら小さな部品を少しずつ整える取り組み。町を自分たちのものとして実感する感覚を育む、物理的なしつらえについてのフィールドワークともいえる。
成長モデルの元につくられた生存と消費を目的とした現代の町を、人間が豊かに生きることを支える場とするために、綻びに当て布をし糸を重ねて繕うように、小さなプロジェクトを継続的に積み重ねている。



東長崎での活動ダイアグラム
３つの事業を協働させ、プロジェクトがうまれやすい環境を整えている。町の営繕は各活動からの気づきを仕組みやしつらえとして具体的にプロジェクト化する部門をになう。

町の営繕カタログ（抜粋）

すでにあるものを観察し調整し繕うことで、よりよく自分の場所にする。
町のなかに自分が関わることができそうな構えをふやすことで家という単体を超えて、町に共に住まうという感覚を育む。都市生活者が町を自らケアし自分の場所とするために必要な道具を詰め込んだツールカートを持っていけば事足りる、小さな作業の積み重ね。

凡例

a. 名前
b. 発注元
c. 施工者

001
a.コンクリート剥がし花壇
b. MIAMIA
c. ARA

ひび割れたコンクリートを剥がし、土を入れ替え植栽を植えた。水やり、追肥、剪定、成長の見守りと小さな土が街にいくつかの仕事と関わり方の種類をうみだしている。

009
a.ブックポスト
b. 密番館
c. ARA
企画：小木花
グラフィック：Ohri Ogi

005のベンチ横に作ったブックポスト。地域に循環させて遺本を入れて、どれでも持って帰ってください、という簡単なルールで運用している

012
003+5+8+9+10
a.前庭セット
b.それぞれ
c.それぞれ

前庭を使った結婚式小さなしつらえの連続が、特別なハレの日を作る様子。006の10mベンチはヴァージンロードとなり、003の畑ののらぼう菜を新婦が摘んでパスタソースにした。

015
a.長崎小コミュニティ・スクールヤード
b.豊島区
c.ARA+小学生+教員+渡邊建設+教育委員会

近隣の工務店にも協力いただき、子供達に工具の使い方の指導をしてもらいながら、ワークショップを行った。

019
a.トマト缶テーブル
b.CADOTA
c. ARA

トマト缶テーブルでは、毎日シェフがオープン前にパスタを作っている。簡単なしつらえが、町の外に生産の風景が現れるきっかけをつくる。

町の営繕マップ（2020-2023）

マップの中の青い部分は町の営繕活動をナンバリングしたもの。緑は 2022 年以降に東長崎商店街にオープンした個人商店。徒歩圏内に小さなプロジェクトやしつらえを連鎖させている。あそこにいると誰かいる、なにかできる、私も何かできるかもという可能性の連鎖でもある。建築の「真似できる知性」という側面を意識的に展開している。

2020 年の 4 月から豊島区の東長崎というところで小さなコーヒー屋さんを営み始めました。物件を見つけた時角の地面のコンクリートが割れていて、危ないということで誰かが赤いコーンを置いていました。補修より簡単だろうと、コンクリートのヒビを広げて、下の土を出してみようと思いました。バールでヒビをこじ開けていると、通りがかりの人たちに、コンクリートの下って土が入ってるんだ！という声をたくさんかけられました。

都会での暮らしは、いろんなものに覆われています。アスファルトやコンクリート、サイディング、壁紙、などなど。その覆いは表面強化されていて、隙間もなく、壊れたら業者さんや行政の人をを呼んで補修するため、覆いの下がどうなっていて何があるのか、ということを想像しなくても生きていけるようになっています。

ヒビを広げた部分にはユーカリを植えました。いまではユーカリは 2m を超え、気を抜くといつも歩道にはみだしています。はみ出してくる枝を切ってご自由にどうぞ、とおいていたら、今では勝手に剪定してくれる人や剪定した枝でリースを作る人、水やりをしてくれる子供なども現れ、気づけば、素敵な下草も植えられていたりします。幅 10cm 長さも 30cm にも満たない小さなコンクリートのヒビ。そこから消費活動ではない街への関わり方がいくつも生まれ続けています。
ヒビを入れることの可能性に気付いた私は、町のいろんなところのヒビを見つけては、ちょっとこじ開け始めました。今この活動を「町の営繕」と呼んでいます。その名の通り、町を繕う営みです。
事務所の入っているアパートの前庭は 2 畳ぶんくらいのコンクリートを剥がして畑にし、アプローチは幅 20cm 分くらいのコンクリートを全長 5m くらい剥がしてみました。塀を低くしてベンチをくっつけたり、塀に穴を開けてみたりもしました。

そんな小さな操作の積み重ねで、住宅地の中の私有地が、公園とも広場とも道とも違うけど、誰でも使って良さそうなスペースになりました。毎日誰かがやってきては野菜を眺め、ベンチに腰掛け、本を読み、挨拶する、ちょっとした人だまりの風景が生まれました。

境界線を引いて公私がきっちりと切り分けられている町。所有と責任が可視化されたような街並みの中に、そこら辺がよくわからないしつらえと状況をつくる。これは、現代の社会問題の多くを解決する、とても重要なことであると考えています。
そこには、建築の知性が建築単体を超えて、お隣さんや、町、都市、地球のために発揮される可能性の地平が広がっています。

アリソン理恵さんは2021年から、自身の設計事務所とコーヒーショップ、キオスクのあるアパートを中心として、豊島区東長崎の町の営繕に取り組んでいます。これらは一般的な建築の設計請負の枠組みから溢れてしまう小さな仕事ばかりです。建築士自ら、町を観察し、地域の小さな綻びを、住人とともに治していく。そのことを通して、みなが町を自分の場所として感じられる動機と行動を耕す。それによって、町全体が紡がれていく可能性に挑戦してきた３年間の軌跡が応募対象となっています。丁寧に作成された応募書類から、アリソンさんの地域に対する真剣で愛情深いまなざしが感じられ、建築士が生活者として関わるからこそ、まわりのひとも自然に巻き込まれていく様子に共感を持ちました。ひとりの建築士からはじまった運動体の糸によって、東長崎がこれからどのように紡がれ、よりよい暮らしの場となっていくのか。アリソンさんは、建物だけでなく、町全体の心配事を一緒に治してくれる町医者のような建築士なのだと思います。

貝島 桃代

3 まちとみどりの実験室

池田 雪絵、大野 俊治

まちとみどりの実験室は、コロナ禍に練馬区石神井の小さな拠点からスタートした**みどりを軸としたまちづくり**のグループである。空室が増えつつあるマンションの中でも特に防犯性から回避される一階部を、建築士を含むメンバーがシェアオフィスに改修するにあたって庭を開いた事を発端として、**地域の在来種緑化**による生物多様性の向上、バイオネストによる地域の土壌資源の保全などを住民参加で行い、それらを地域に波及していくことでみどりのネットワークを広げていく試みで、自らの身近な地域の都市環境を改善し、**持続可能な循環**を増やし、点から線へと波及している。また、多様な専門家や教育研究機関と協働して**実験や学びの場**をつくり、緑の保全・メンテナンスのスキルを地域で共有・蓄積し、体験型の教育 WS やイベントでの展示などを通してその知識を地域とシェアしている。

活動には**多世代**が参加しており、挿木や苗づくり、剪定、バイオネスト作成など緑の手作業を中心に自然な交流が生まれる**共助的コミュニティ**として年々**ネットワーク**を広げ、練馬区の「みどりのまちづくりセンター」の助成事業としても支持され、地域との繋がりを評価されている。

地域の中で緑を通して循環を考える取り組みの好例。実験室という名前の通り、緑化や循環を様々なツールや切り口で試行錯誤していく段階がとても興味深い。循環やサスティナビリティというと、どこか実感から離れてしまいがちだが、彼らの小さな取り組みの連続は、サスティナビリティの日常化であることが想像された。田瀬さんをはじめ、専門家の知恵や経験がインストールされる体制も評価できる。

西田 司

4

再生をデザインする

渡邉 明弘

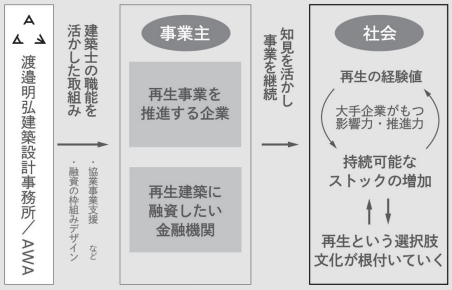
再生をデザインする

AKI WATANABE ARCHITECTS

渡邉明弘

既存のポテンシャルを最大化し、新築では得られない再生ならではの建築を作る取り組みを、学生時代から 10 年以上継続している。大半のプロジェクトで、検査済証のない違反建築での検査済証再取得、居ながらでの耐震化や長期融資の確保といった、需要が増えながらも敬遠されてきた技術的課題を解決し、建物を長寿命化させてきた。
近年では事業主から関心を寄せられる機会も増えつつあり、ただ建物ひとつひとつの再生に取り組むだけでなく、空間デザインから築古物件再生への事業拡張を目指す大手デザイン会社との協業や、金融機関との融資の枠組みデザイン、中小企業による建物再生の新規事業立ち上げ支援など、再生という選択肢そのものの更なる普及に係る活動にも取り組んでいる。

再生を新しい建築文化としてデザインし、社会にその可能性について認知を広げ、根付かせていきたい。成熟社会に転換した現代において、今あるの建物の活用に対する発想力はますます求められ、そこに再生の文化と技術が必要とされると確信しているからである。



■ harport suginami sud　2021~2024

1975 年新築　RC 造
用途：共同住宅

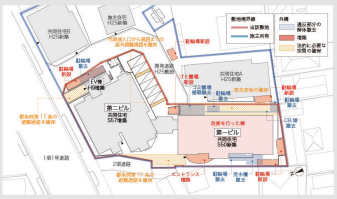
築 49 年の老朽化・陳腐化した共同住宅の再生。内外装や設備を一新するだけでなく、違反部分を遵法化させつつ耐震補強とエントランス・駐輪場の増築を行った。既存躯体の形状やスパンなどを活かした再生ならではの建物になり、新築並みの賃料で募集開始から間も無く満室となった。

●再生による長期融資の枠組みをデザイン
設計前に入念な企画・調査を行い、遵法性や耐震・耐久性を確保することで、法定耐用年数を超過した建物で長期融資を組むスキームを金融機関と協議した。
金融機関としても、新規市場開拓や循環型社会への貢献といった面で非常に前向きではあったが、前例の乏しさや技術的な問題から、長期融資に踏み出せない状況であった。今回の事例はこれらのハードルを超えて、社会的意義のある新しい融資の柱になった。

●法適合状況の整理
敷地内では、新築や増築、私道の新設が繰り返された結果、複雑な法的状況となっていた。今回の主な工事対象は最初期に建てられた棟であったが、検査済証の無い建物で増築の申請を行うため、他の棟も含めた敷地全体で法適合状況を整理し、検査済証を再取得した。

①

②



②

②

■ REDO JIMBOCHO ／神田神保町武田ビル再生　2021~2023

1974 年新築　RC 造
用途：シェア型複合施設（店舗・事務所・寄宿舎）

施工会社の建物再生新規事業のモデルケースとして雑居ビルを再生。各分野の専門家とチームを組み、企画から竣工までシェア的な手法で協業し再生の可能性を広く提示した。

①

■ ウィンド小伝馬町ビル　2021~2024

1972 年新築　SRC 造
用途：事務所・店舗

デザイン会社との協業 PJ 2 件目。
特定緊急輸送道路沿かつ Is 値 0.3 未満ながら耐震化が未着手だったが、意匠や設備一新と連動した総合的な計画で耐震化を実現、屋内環境や安全性を向上。

③

■ 茜浜 XPT　2021~2023

1987 年新築　S 造
用途：事務所・店舗

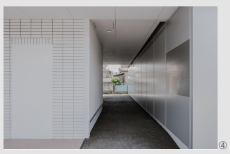
郊外ロードサイトのテナント施設。過去のキーテナント誘致で煩雑化・不合理化した空間構成や敷地利用を、キーテナントを退去させることなく再編成。

④

■ 袖ヶ浦の長屋　2021~2023

1970 年新築　RC 造
用途：店舗・共同住宅

茜浜 XPT と同施主からの依頼。
減築により違反増築を解体しつつ建物の表裏を接続。過去改造でスポイルされていた動線や区画を再編し、駐車場やアプローチも確保。


④

■ 福祉施設（就労継続支援 B 型施設）　2017~2022

貸テナント内装を 4 件担当。

物件探しから伴走し、用途変更、検査済証のない建物では法適合調査、是正を実施。小規模施設は必要諸室を詰めるのみの箱となりがちだが、既存建物の特徴を活かして就労者が人間らしく社会参加できる場を考えた。

③

■ art BLD.　2016~2017

1979 年新築　RC 造
用途：専用住宅・店舗・ギャラリー

用途変更を伴う再生。旧耐震の躯体を減築することによる軽量化で実質的な耐力を向上。また、防火区画の考えを整理して、開放的かつ再生ならではの空間に再構築。

③

写真撮影：①鳥村鋼一 /②小島康敬 /③堀田貞雄 /④堀越圭晋

再生という枠組みを、どう持続的なものにするか、どうデザインの問題にするかを試行錯誤していることが端々から伝わってくる提案書であった。検査済証のない違反建築での検査済証再取得や、居ながらでの耐震化や、長期融資の枠組みなど、どれも需要が増えながらも敬遠されている、建築家の専門性を使った取組みの数々が素晴らしい。渡邉さんのような再生の専門性と、そこでのデザインの両立が今後の職能になっていく未来が楽しみである。

西田 司

5

石飛 亮

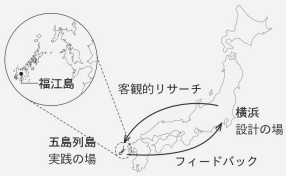
島へ通い続ける

『島へ通い続ける』

石飛　亮／WANKARASHIN

WANKARASHIN

1. 離島へ通い続けてリサーチ・設計・実践のサイクルをつくる

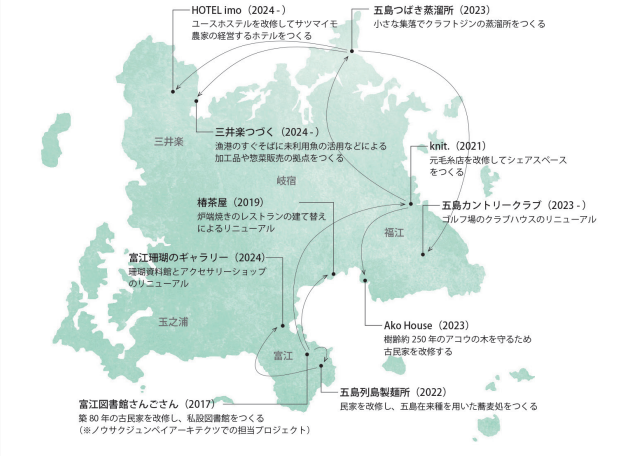


これまでの一般的な設計業務は単発のクライアントワークが基本であり、その蓄積はプロジェクトが完了するたびにほとんどリセットされてしまい、事務所の実績として残るのみであった。WANKARASHIN では横浜に拠点を置きながらも長崎県五島列島福江島へと継続的な関係性を築き、長年にわたりプロジェクトを行なっている。あえて拠点を移さずに離島へと通い続けることで、常に客観的な視点を養い、研究対象として観察し続けることを実現している。
設計と並行して島のリサーチを行うことで、島内からとは違った角度で島の特性を捉えることができ、それに基づいた現地での実践からフィードバックを得る。それらを継続することでリサーチ・設計・実践の連続的なサイクルをつくり上げている。

2. 同じ地域で相対的にプロジェクトを展開する

同じ地域でプロジェクトを継続して行うことで、その地域のことをより深く理解することができ、プロジェクト自体の解像度も上がっていく。また同じ島内においても集落ごとに風土や文化は少しずつ異なっており、それぞれの敷地をプロジェクトを通してリサーチしていくことで各々の特性が相対化される。また自身の設計した建物を定期的に観測することも可能となり、そこからのフィードバックを得て次の設計に繋げることもできる。

五島列島福江島におけるプロジェクトのネットワーク図

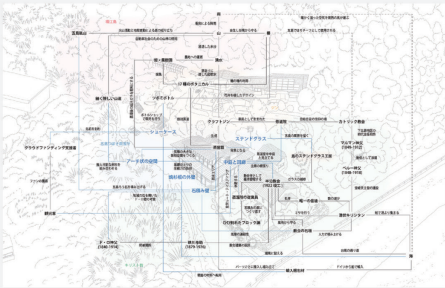


3. プロジェクトを通して横断的・継続的なリサーチを行う

プロジェクト自体の設計を進めると同時に、島のリサーチを並行して行う。プロジェクトに直接的に関わる内容はもちろんのこと、その周辺の事象に至るまで可能な限り満遍なく調査を進める。
思わぬところから設計のヒントになることもあるし、それが将来的な別のプロジェクトの手助けになることもある。できるだけ取りこぼしのないように取捨選択をせず、フラットに物事を観察することによって、島全体の解像度を上げることにもつながっていく。

島の民家のファサードを記録し建築形式を導き出すリサーチ（一部）

珊瑚漁で切り取った富江地域を中心とした島の歴史リサーチ



五島つばき蒸溜所の設計時に行った半泊集落におけるネットワーク図

4. 島でこそ可能なつくり方を模索する

島にないものは多く、手に入らないものは島外から運び入れるという選択肢しかない。逆に島だからこそ手に入る資源や技術も存在する。可能な限り島内で自活できるようなつくり方を模索することで、島ならではの風景を守ることにつながる。昔ながらのやり方から学ぶこともあれば、既存の素材を今まで試みてこなかったような施工方法で実験的に取り扱うこともある。このように建設作業を通して、素材の可能性を広げることにもなり得るし、職人の技術を伝承したり発展させることにも繋がっていく。

島内で利用できる素材の開拓（五島鉱山で採掘される五島ろう石の活用等）

島内に残る技術の継承と発展（教会建築のステンドグラスの加工技術等）

搬入可能な木材を用いたプレカットに頼らない手刻みでの大スパン架構

政府や自治体の役割として、平等の実現のための「再分配」というものがある。同様に、あることの実現のための「再分配」を建築士の仕事として考えることができる。もしそうであれば、それぞれの仕事で収支が合う必要はなく、仕事全体で収支が合えばよいことになる。だいたい、お金は大切だけれど、お金では測れない価値もある。離島は経済活動の面で見ればきびしい。しかし離島には、人と人の密なつながりなど、経済では測れない価値がある。それが離島だ。だから、離島に経済的価値観を持ち込むことは、離島の実質的な破壊である。石飛さんが「島に通い続ける」のは、そういう離島の生活を守るために、あるいはより（島の論理として）豊かにするために、「島」以外の、つまり経済活動が基礎となっている世界で得た利益をつかって、島での活動をするためだ。これは建築士の新しいあり方であり、また価値観である。

青木 淳